

研究ノート

「20世紀初頭の電鉄事業とメディアスポーツ」 のための研究ノート

～第6回極東競技大会（1923）の開催を中心に～

黒 田 勇

The research note for “Media-sports cooperated
by Private railway in the early 20th century”

Focused on the 6th Far Eastern Championship Games (1923)

Isamu KURODA

Abstract

This research note aims to reveal the history of the sports events operated by two newspaper companies, The Osaka Asahi and The Osaka Mainichi, in the early 20th century. It focuses on Minato Ward of Osaka City where several sport-events were held, the 6th Far Eastern Championship Games in 1923, for example, and “Ichioka Paradise” was built in 1925, which consisted of several amusement facilities and the Japan's first artificial skating rink.

Keywords: Newspaper business, Far Eastern Championship Games, Ichioka Paradise

抄 録

本研究ノートは、20世紀初頭、大阪を中心に展開された新聞社によるスポーツ事業と、そのスペースを提供した大阪市港区に焦点を当てる。なかでも、1923年に開催された極東競技大会がどのような経過で開催されたのか、そこに新聞社の人々がどのように関わったのかを明らかにする資料の一部を提示する。また港区市岡に1925年に開設された娯楽施設「市岡パラダイス」の建設経過と、阪神間のスケート競技に与えた影響についても資料を提示する。

キーワード：新聞事業、極東競技大会、市岡パラダイス

はじめに

前稿「20世紀初頭の電鉄事業とメディアスポーツ①¹⁾」において、阪神電鉄が展開した郊外開発と余暇事業、スポーツイベントについて述べたが、その中で、そうした事業を考案

1) 黒田 (2019)

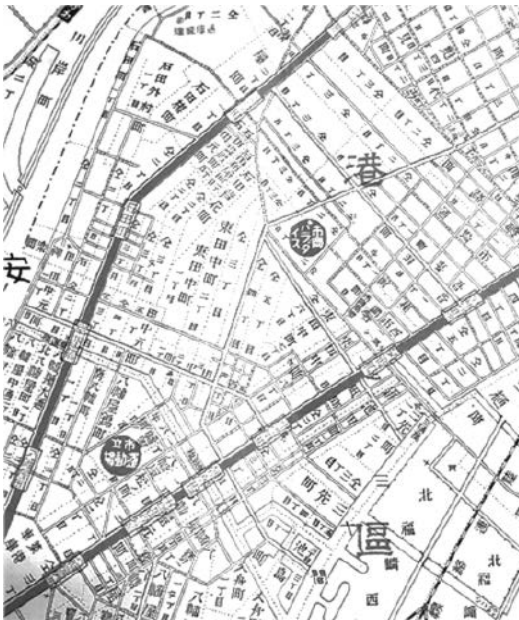


図1 1930年代の大阪市港区の地図²⁾

したり企画を提案したのはほとんどが新聞社であり、また新聞記者たちがそのまま運営にかかわったり、広報に携わったりしていることを明らかにした。またさらに、スポーツ組織の組織化、運営にも新聞記者がかかわることが多かった。この事情については、大河ドラマ「いだてん」において、主人公田畑政治も東京朝日新聞記者でありながら日本水泳連盟を組織、会長となったことで、世の中にも知られるようになったが、1920年代を中心に、多くの学者や新聞記者がスポーツ団体や大会の組織化や運営にかかわっている。という

よりも、高等教育の世界と新聞、そしてスポーツ団体を隔てる壁はそれほど高くなかったのである。そうした状況において、朝毎両紙がスポーツ事業を競っていた関西では、その壁はより低いものだったし、また「いだてん」で東京中心に描かれたフィクションとは異なる歴史を持つ関西の三者の関係を明らかにした。

ただ、現状では明確な歴史資料でその裏付けをするに至らないので、本稿では「研究ノート」として関連資料と仮説を提示するにとどめたい。また、前稿を引き継ぐ形で、関西におけるスケートの歴史についても、新たな事実を提示したい。

本研究ノートでは、大阪市港区で開催された第6回極東競技大会に関連する記述が中心となる。

1. 極東競技大会

大阪市港区の開発

大阪市港区には、現在も市岡という地名がある。現在の港区市岡といえば、大阪市内西

2) 「最新大大阪市街地図」和楽路屋、1931年

部、大阪港に近く、古くからの市街地と思われているが、20世紀の初頭までは、湿地、沼地であり、西瓜畑が広がっていたという。しかし、その西に大阪港を拡張整備するため、築港が造成される。淀川の河口の大阪は土砂が堆積し港には不向きであることから、大型船の入港が可能なように港湾の整備が求められたのである。

そして、築港と市街地の間の道路の拡張により、その両方を結ぶ電気鉄道の敷設が計画された。築港の完成と国内勧業博覧会の開催に合わせ、大阪市営の路面電車が1903（明治36）年9月に花園橋―築港間で営業を開始する。市電の開業は、国内勧業博覧会に合わせようとしたが、結局工事の遅れから間に合わなかったものの、いわゆる「市電」としては日本初であった。その後、第二期として、大阪市内で東西線（花園橋―末吉橋間2マイル）と南北線（梅田―天王寺間4マイル）が1910（明治43）年12月に全線開通している³⁾。

さて、築港までの市電の運転区間は、上述のように湿地が広がっていたが、1906年-1916年頃までに大規模な埋め立てがあり、現在の姿に近づいていく。280万平米の埋め立て計画の下、1906年埋立組合が設立されて堤防建設や浚渫事業が行われ、地主辰巳屋・市岡土地株式会社が1916年に設立されている⁴⁾。

飛行大会

そして埋め立て事業完成直後の1916（大正5）年、広大な埋め立て地を利用してのアメリカ人飛行士による「曲芸飛行」が行われ、多くの見物客が詰めかけたという。ライト兄弟の初飛行から13年、極東の地での飛行機のデモ飛行は大いに大阪市民の関心を引いたようである。前稿で明らかにしたように、飛行大会については、大阪朝日が熱心に取り組み、何度も兵庫県の鳴尾と、その後の水上飛行艇については打出浜で開催しているが、大阪市『港区誌』にも大阪での熱狂が記録されている。以下の「港区誌」の記述は、5月14日の騒ぎを伝える翌日の朝日新聞の記事をまとめたものと思われる。

飛行機がまだ珍しく、「空飛ぶ飛行士はナイルス、スミス…」と磯節にまで流行した程で、チャールス・ナイルスが大正五年一月、鳴尾飛行場や城東練習場で 宙返り飛行を行い、またスミスも同年四月鳴尾飛行場で曲技飛行を行って市民を驚かした。府立市岡中学校北の埋立地でアート・スミスの飛行大会が催されたのは同年五月十四日

3) 大阪市電編集委員会（1980）3-4頁

4) 大阪市港区役所編（1956）56頁



図2 「大阪朝日新聞」1916年5月15日

である。観覧料二十銭で見物人無慮数万という大盛況で早朝より会場に押寄せたが、午前中は、人力車の競争や豆自動車を走らせるだけで飛行を行う様子がないので、見物人はイキり出し頻りに飛行を促し、遂に「飛ばぬ飛行機ならこはしてしまえ」と投石して騒ぐ仕末、スミスは瓦礫で負傷する騒ぎに憲兵が来援して鎮圧につとめ、長岡外史中將が機上に立って慰撫演説をすなど大混乱を来した。一時五十分破碎せられたプロペラを取替えると共に、スミスは二時十五分アレヨアレヨと見るまに忽ち離陸して鳴尾飛行場に飛び去ったので、群衆は切符売場に殺到し、九条署に押寄せて大騒動となったが、警察署にて主催者雨森茂市を呼び出し切符代金を払戻して、漸く鎮まった。このスミスは翌六年四月再び日本に來り、大阪上空の夜間宙返り飛行を行い市民を感嘆させたものである。⁵⁾

市立運動場の建設

大阪市内の運動競技場は、1909（明治42）年に、天王寺公園、中之島公園運動場と作られた。中之島運動場については市会議員清水義吉の提案により1916（大正五）年F. H. ブラウン（神戸YMCA）の設計でトラックが作られ、陸上競技場として全国最初の市営となっ

5) 同上57頁

た⁶⁾。この段階で、YMCA が
かかわっていることは興味深
い。そして、1922年6月、大
阪体育協会が組織され、会長
に池上四郎大阪市長が就任
し、港区築港に市立運動場が
建設されることとなった。

「港区誌」には下記のように
書かれている。



図3 大阪市立運動場⁷⁾

市立運動場は大正十二年五月大阪市において第六回極東選手権競技大会が開催せられるに当って、これが会場として建設されたもので、世界的に知られるようになり、大正から昭和の初めにかけて近畿地方での大きな競技会は殆どこゝを会場として利用せられた。大正十一年七月より安治川と会社によつて敷地の埋立工事が着手され、同年十二月に終り、市が会社より敷地全部の引継ぎを受け、設備費二十二万四千円で十二年四月に完成した⁸⁾。

この市立運動場は、当時「東洋一」と謳われ、1923年開催の第6回極東競技大会に使用された。むしろ、この大会誘致のために会場建設、その後の大阪のスポーツの展開に影響を与えたとされる。現在は大阪市八幡屋公園として各種スポーツ施設が運営されている。

この極東競技大会で日本選手団の主将を務めた佐藤信一は、戦後この競技場のことを次のように回顧している。

築港八幡屋に陸上競技場、プール、野球場、テニスコート二面を建設したが、陸上競技場のプールは永久的設備で其の規模は東洋一であつた。今でこそ十万人を容れる甲子園球場が出来たが、当時二万人の収容力を持つコンクリート・スタンドは日本人の目を見はらすばかりであつた⁹⁾。

6) 佐藤（1954）20-21頁

7) 大阪市立図書館デジタルアーカイブより転載

<http://image.oml.city.osaka.lg.jp/archive/detail?cls=ancient&pkey=d2503001>

8) 大阪市港区役所編（1956）63頁

9) 佐藤（1954）7頁

極東競技大会（「東洋オリンピック大会」）

そもそも「極東競技大会」は主催を極東体育協会が行い、米 YMCA からフィリピンに派遣されたエルウッド・ブラウンの提唱とされる。この極東大会については、S. ヒューブナーの『スポーツがつくったアジア』（2017）にその開催理念が分析されている。

彼によれば、アメリカのプロテスタント的な男性観、人間観、そして文明観のもとに、スポーツを通してアジアを文明化する営みの過程として一連の極東大会は存在したことになる。言い換えれば、YMCA に代表される西洋のヘゲモニーが貫徹する過程としてとらえられるが、そこには、アジア的なものからのスポーツ、文明のとらえ直し、葛藤があった。彼の研究は、日本の体育史、スポーツ史の展望を大きく超えるものである。彼以前に、極東大会をアメリカおよび西洋によるアジアの近代化、キリスト教の布教というイデオロギー的観点から考察したものはなかっただろう。ただ、本稿では、彼の分析にしたがった極東大会論を詳しく述べることは差し控える。とはいえ、日本における近代化、さらに20世紀初頭の都市とメディア、スポーツという本研究の枠組みは、ヒューブナーの研究とは決して遠いものではない。前述の通り、大阪における運動場の設計も YMCA がかわっている。

さて、これまでの極東大会についての記述にしたがえば、日本スポーツの国際化の一つ、オリンピックへ至る前段階としてとらえられてきた。ただ、1913年の第一回への参加勧誘に対して、日本は積極的ではなく、日本体育協会の協力は得られず、結果として、野球について明治大学野球部を派遣、陸上は2名のみが大阪毎日によって派遣されるにとどまった。

その原因について、ヒューブナーは、日本体育協会会長の嘉納治五郎の無関心を上げている。

嘉納が関心を持たなかった理由として挙げられるのは、①彼と他の IOC メンバーが「オリンピック」の呼称はオリンピックだけに確保されるべきだと考えた、②日本はすでにオリンピック大会に参加したので地域限定の組織を新たに設立する理由はない、③中国やフィリピンなど（他の）アジア諸国とは対照的に、オリンピックムーブメントにおける日本の役割がもたらした優越感、④アメリカ人によって作成された規則、⑤大きな財政的困難、⑥ YMCA のようなキリスト教組織の役割に関する疑念、⑦バレーボールやバスケットボールのような団体競技の採用、である¹⁰⁾。

10) S・ヒューブナー（2017）393頁

当時を回顧した遊津孟は、嘉納がアジア体育協会に加盟しなかった理由を次のように記している。

加盟しなかった理由として当時の嘉納会長が指摘された点は、一つはアジア大会とはいえアメリカ人で当時フィリピンにいた人が形成したものである。二つには種目もアメリカ人式である。三つには国際オリンピックというのがあるのに東洋オリンピックという名称を使用している。東洋と称しながら日本にその設立の相談なく、会の規約などができあがってから日本に参加を勧めている。大会に入場料を徴収して旅費を支払ったなどの数点をもってあきたらず、とされていた。¹¹⁾

両者の記述を総合すれば、アメリカ人のそれも YMCA 主導でフィリピンを中心としており、オリンピックを見据えた日本に相談がなかったことが、嘉納治五郎の不興を買ったということであろう。ただ、当時の大阪のメディア事情から読み解けば、また別の側面も明らかになりそうである。この大会に派遣された二選手、田舎片善次と井上輝二は当時長距離競争に熱心に取り組んでいた大阪毎日新聞主催の二つの大会の優勝者であった。この二大会の様子については、棚田真輔・青木積之介『阪神健脚大競争』（1988）に詳しい¹²⁾。田舎片は1911年のクロスカントリーレースの優勝者であり愛知一中の生徒であった。また、井上は1908年のマラソン大競争の予選会の優勝者である¹³⁾。ちなみにクロスカントリーは箕面電軌鉄道（現阪急電車）が加わり、ゴールは当時経営されていた箕面動物園に設定され、大群衆が詰めかけている。

そして大阪ホテルでの優勝祝賀会では、「大毎の今回の計画が体育上甚だ大きい利益があることを強調し、箕面電鉄会社の設備が整っていることを称し、走者の勇壮な行動によって大阪住民の多数を郊外に誘い一日の愉快を味あわせてくれたことを感謝した¹⁴⁾」という。繰り返しになるが、ここでも鉄道が郊外に人を運び、そこでスポーツイベントが開催されるという新聞と鉄道の連携がみられる。

さらに、田舎片は極東オリンピックにおいて出場競技全てで優勝している。大毎は1913年1月2日に「我社の新計画」として以下のような記事を掲載する。

11) 遊津（1975）128頁。遊津の回顧には出典が明らかにされていない。

12) ただし、この著作には巻末の参考文献があるものの、引用等についての出典が明らかでないため、できる限り引用元であると思われる毎日新聞紙面と照合して記載している。

13) 棚田・青木（1988）

14) 同上325-326頁、この引用は、大阪毎日新聞（1912年4月29日付朝刊）の記事を現代語訳したものである。

東洋オリムピック大会と称する国際競技は来二月マニラに開かるるものを以つてその嚆矢とす。常に体育の奨励を以つて自ら任ぜる我社は座視して此好機を逸すべからず。乃ち我社は我社特選の二名の選手を派遣して此大会に参加せしめ絶東帝国男児の為に聊か気をはかしめんとすなり。

さらに、1月7日には、先の二人の派遣を発表している。井上は、毎日新聞社員として派遣されたのである。

来る二月一日より馬尼刺カーニバル祭において挙行さるべき東洋オリムピック大会は東洋空前の大競技会にして之に参加すべき在東洋各国人実に十五ヶ国を超え盛況殆んど比なからんとす。是れを以つて吾社は日本運動界のために万丈の気を吐くべく競争界の勇者を選抜して派遣せんことを計画せるがいよいよ右選手は…（後略）



図4 「大阪毎日新聞」1913年1月7日

（「大阪毎日新聞」1913年1月7日）

こうして、大毎は、この東洋オリンピックの模様をマニラから詳しく伝えることとなる。そして、その記事の多くは、井上自身によるものだった。因みに、このように派遣選手自身が記者となって取材報道するという大毎の生み出したこの形式は、1928年のアムステルダムオリンピックにおける人見絹枝に受け継がれる。

井上自身が書いたのかどうかは定かではないが、現地からの記事では「オリンピック」が強調されている。

馬尼刺に於ける吾社派遣選手 兩選手共元氣旺盛也

今回當地にて挙行の東洋オリムピック大会に出場すべき大阪毎日新聞社派遣の田舎片、井上兩選手は去る十七日無事到着せり兩選手は意氣頗る旺盛にして當地在留民の歓迎を受けたるが日本より長距離競争の大選手を送られたることはオリムピック大

會の大に満足し居る處にしてこれがため更に人氣一層引立ちたる觀あり兩選手は昨今漸く氣候にも馴れたれば日々練習に怠りなきが成績頗る良好にて在留民一同多大の希望を寄せ居れり又明治大學の野球選手一行は二十三日無事到着同じく非常の歡迎を受けたり日本選手はこれにて悉皆到着済みとなれるが志那人選手四十名は本月末渡來の筈にて兎に角今回の大會は出場選手意外に多ければ空前の盛況を呈するならんと期待せらる

（「大阪毎日新聞」1913年2月7日）

以上の経過からは、次のような仮説を立てることができよう。設立間もない大日本体育協会は、東京主導で三島弥彦と金栗四三を1912年のストックホルムオリンピックに出場させた。ただそれ以前から、大阪でマラソンの強化とオリンピック参加を訴え、長距離イベントを開催してきた大阪毎日にとっては¹⁵⁾、その主導権を奪われ、それまでの努力を無にされたものと映ったかもしれない。そして、この「東洋オリンピック」への参加は、これまでの毎日新聞の努力を少しでも社会に訴える機会であったことは想像に難くない。偶然であるが、大会会期中の2月8日付で「大毎選手出発」として田舎片、井上両選手がマニラから帰国の途に就いたとの記事の隣に、ストックホルム五輪出場の後、欧州のスポーツ事情を視察していた三島弥彦の帰国と報告会の模様が掲載されている。

その後、1915年 第二回は、「オリンピック」という名称は使用されず、「極東競技大会」として上海で開催され、ここでも大阪毎日新聞は二名を派遣している。そして、1917年 第三回は東京芝浦で開催され、これが日本初の国際スポーツ大会として位置づけられる。1919年第四回がマニラで開催され、東京の大日本体育協会は不参加を決定したのに従い、大阪の有志が結成した日本青年運動俱樂部が大阪毎日新聞の援助のもとで16人を派遣している¹⁶⁾。こうして、大阪毎日は極東大会の派遣と開催に引き続き情熱を傾け、1921年第五回上海を経て、1923年第六回が大阪で開催されることになる。

ところで、戦前戦後と日本のスポーツ界を牽引した一人の平沼亮三は、1925年の上海大会の派遣団長として、上海での閉会式の模様を回顧している。

全體の優勝者、即ち日本が天皇盃を授與され歟。私が團長として恭しく日本軍代表の織田幹雄君と谷二三五君の二人に授けた。忽ち嚟々たる國歌が吹奏される。満場

15) 黒田（2019）3-9頁

16) 佐藤（1954）3頁

の日本人は、歡喜其の極に達して、一齋に「君が代」を奉唱したが、途中まで歌ふと、皆泣いてしまつて兎もすればとぎれる。と、誰かがまた聲をふり絞る。漸くにして歌ひ終つたといふ有様であつた。各國人の環視の中にあつて、説く殊に敖然たる英米人に事毎に押され勝ちであつた當時の上海に於て、日本人が始めて勝つた嬉しさが、何んなものであるかは想像出來よう¹⁷⁾。

このように、極東三か国の大会であるとはいえ、平沼の思いは「英米人」に向けられているし、さらに、これまで勝てなかったはずの中国に対する「優位性」もまた垣間見られる。

支那側の審判が誤審といふよりも審判能力がなく、しかも「審判の絶対権」をのみ振り廻す次第で不愉快な點が多々あつた。しかし、出發の當時から前回のマニラに於ける中途退場といふ不詳事を繰返へさないやう如何なる事があつても、飽くまでもスポーツマンとして總べての競技に當らうと誓つてゐたので、選手も出來ぬ我慢をしたのである。尤も支那側も競技規則其の他に對して未熟なる事を自ら告白してゐたので、我々も、彼等を導き發達させる意味からかなりの犠牲を忍ながら、最後まで競技を繼續して競技精神の眞髓を發揮したのである¹⁸⁾。

以上の平沼の回想からも、極東競技大会とはいえ、常に彼の準拠は欧米であり、さらに、フィリピンと中国に対する優越意識がうかがわれる。ヒューブナーが指摘したように、嘉納治五郎をトップとする日本（東京）のスポーツ界が極東大会に消極的であつた理由の一部が、ここでも表現されている。

第6回極東競技大会（大阪開催）

第6回大会は、1917年の東京大会に次いで二回目の日本開催であり、また大阪にとっては初の国際スポーツ大会であつた。この大会を契機として大阪、そして日本のスポーツ事情は大きく変化していくことになった。佐藤信一は、戦後になって、第6回極東大会を「大正十二年五月二十一日から二十六日迄日本として二度目の極東大会が大阪に開かれた。これについては當時の池上市長の英断と、大阪のスポーツ人の旺盛なる意欲と努力を認めね

17) 平沼（1994）147頁

18) 同上145頁

ばならない」¹⁹⁾と評価している。また会場となった「港区誌」においても以下のように回顧している。

第六回極東選手権大会は、日本・中華民国・フィリッピン三国によって、十二年五月二十一日より六日間各種競技が行はれたが、秩父宮殿下御台臨の入場式は雨中の中に行われ悲壮な光景を描いた。本大会は総点数日本一三八点一、比国九五点七、中国七点二にてわが国は圧倒的成績をもつて選手権を獲得したが、野球、排球、籠球は比島に敗れて二位となった²⁰⁾。

ヒューブナーによる1923年の大阪大会についての記述は前出のF.H.ブラウン（神戸YMCA）の英文記録を参照しているが、以下のとおりである。

一九二三年五月の第六回極東大会はコンクリート製の競技場（大阪市立運動場）で開かれた最初の大会だった。この競技場は二・七万人を収容できる特別観覧席と一般観覧席を備えていた。その建設は、関西側が関東側に合流するかわりに大会の開催権を大阪に与えるという関西と関東の役員の間でなされた妥協の条件の一つだった。その競技場はそれ以前のすべての会場を凌いでいたが、それでも大きな欠点の一つあった。「皇室席」以外は屋根がなく、それは雨の日々に観客が濡れねずみになることを意味した。

大阪では競技者の収容も問題となった。マニラ、上海、東京のようなより「国際的」な都市で開かれた極東大会でもそうだった（そして、その後もそうなる）ように、YMCA／YWCAの国を超えたネットワークと中国人ディアスポラの関係（コネ）が再び重要となった。中国の男性競技者は中華会館に身を寄せ、裕福なスポンサーから一時的に別荘の供与を受けたYWCAが女性競技者を世話した。テントを持参したフィリピンチームは最終的に開校前の新設小学校というより良い代替施設を提供された。宿舎の問題は、依然として国際スポーツ大会の開催でコストを低く抑えるという考えが示されているという点で興味深い。近代的市民教育は依然として大規模なインフラの整備やネイションのブランド化よりも重要な問題であった。たしかに、コンクリー

19) 佐藤（1954）7頁

20) 大阪市港区役所編（1956）64頁

ト製の競技場は大阪が東京と対抗し西洋の競技場と（ある程度まで）肩を並べるための名誉ある事業であった。しかしながら、その主たる目的は、大阪とその周辺地域でスポーツを普及するのに役立てることだった。極東大会を利用して、大規模建設事業を西洋列強の首都、あるいは少なくとも東京に対する挑戦として実施することは重要ではなかった。

開会式は簡素で、しかも激しい雨のために台無しになってしまったようだが、日々の教育的集団遊戯の実演は、第五回極東大会と比べても、さらに野心的であった。一二三の学校と四七の団体から三万人近い少年少女が遊戯、フォークダンス、体育訓練などに取り組む予定だったが、一部の演目は雨のために中止になってしまった。日本の学校で実施されていたものを連想されるこれらのさまざまな体育活動は満州事変以前の戦間期における軍隊体操からスウェーデン体操やスポーツへの変化を際立たせている。大会に参加を希望する学校はそれに先立って生徒に準備させるためにカリキュラムを修正しなければならず、こうして学校のカリキュラムに影響を及ぼすというアメリカ YMCA の目標はいつそう明らかとなった。フランクリン・ブラウンは（一致と垂直的思考を促進する）体育訓練よりも、YMCA の平等主義的アマチュアスポーツのメッセージをよりよくスポーツの実演が望ましいと語ったが、日本人の共同主催者の意見を受け入れざるを得なかった²¹⁾。

ここでもヒューブナーの関心は、YMCA のスポーツ普及についての宗教的な野心と日本の体育思想の対立であり、その中で大会をとらえている。ただ、日本における東西のスポーツ団体の「軋轢」についてはヒューブナーも触れている。「その建設は、関西側が関東側に合流するかわりに大会の開催権を大阪に与えるという関西と関東の役員の間でなされた妥協の条件の一つ」とするのは、先述のマニラ大会に日本青年運動倶楽部が大日本体育協会の不参加を無視して参加したことに関係する。この問題の解決交渉が1921年1月になされたことを指しているようであるが、ヒューブナーが指摘するように、大会開催は一筋縄ではいかなかった様子が新聞記事からもうかがわれる。大会前に、勇躍乗り込んだ関東の選手団が大阪の運営に不満を表明し、大会への「不出場を決議」している。東京朝日の記事見出しには次のような言葉が躍っている。

21) ヒューブナー（2017）117-118頁

「第二豫選の選手 不出場を決議す 極東競技を前の大紛擾 新競技場を散々に 蹂躪され 其上大阪市の不誠意を憤慨 昨夜三箇條の質問書を提出す」

（「東京朝日新聞」1923年5月5日）

とはいえ、当時、唯一といってもいいスポーツ雑誌『野球界』は、1923年に入って極東競技大会の特集を組んでいる。後に大阪市長となる関一が大阪市助役として「大阪市が建造する大運動場の設備」というタイトルで『野球界』（1923年4月号）に、競技場の概要を紹介している。これを含め、その他の新聞記事からは、東京のスポーツ界もそれなりの注目をしていたことが確認でき、報道量からも、その「軋轢」を読み取ることは難しい。もちろん、地元の大阪発行の朝毎両紙の報道量ははるかに大きかったが、それ以上に、大阪における朝毎の視点に差があることは興味深い。開催にあたって、大阪朝日もその意義を長い文章で披歴している。その内容は、欧米に劣るアジアのスポーツ界の実力がこの大会をきっかけとして伸長していることと、さらに女子スポーツにとって初の国際競技であることなどを述べている。

従来極東におけるスポーツは、其歴史の新しいだけに、遺憾ながら、欧米のそれに比して非常なる懸隔があり、見劣りがした。國民全體としても亦理解に缺くところが少くなかつた。斬うした事情の下に生れた極東大會の使命は甚だ重かつたが、回を重ねる随ひ、極東運動界の進歩は眞に驚嘆に値するものあり、最近に於ける記録は凡ての方面に於て一歩々々欧米一流選手の堅壘に肉薄しつつある。数年前までは殆ど一人の世界的選手をも有しなかつた我極東の諸國は、今や或種の競技に就ては、堂々と世界に其覇を争ひ得る地位にまで進んで來た。そしてその後継者たる國民も亦世界的選手の輩出を刺戟、従来餘りに冷淡、無頓着であつたことに氣が付いて來た。吾人は今回の大會が偶々斯の如き機運に際會して開かれたといふ事から、特に本大會に附せらるべき重大なる意義と燃ゆるが如き希望とを感せずには居られない。殊に極東に於ては、婦人選手が國際競技に現はれた最初の機會でもあり、確かに其運動史に一エボックを劃して居る。（後略）

（「大阪朝日新聞」1923年5月21日）

これに対し、第一回のマニラ大会に積極的に選手を送った大阪毎日、大阪朝日を意識したスポーツにおける「プライオリティ」意識が強調されている。

殊に過ぐる十年前始めて此の地に運動の様子を蒔いたプリオリチーを持つて居り、その後引続き陸上競技は勿論、水泳、庭球、野球、蹴球その他凡ゆる方面の宣傳と奨励に力を盡し得た自信を有する我が大阪毎日新聞社は今回の大會が遂に我が大阪の地に開催されるに至つたことの双手を挙げて喜び且つ三國代表選手竝に役員に對し衷心歓迎の意を表するものである。

顧みれば始めて野球を香櫨園に主催した時、阪神マラソンを行つたとき、十五哩競技や庭球大會を行つた時の思ひ出を反覆するとほした感慨に耐へぬものがある而して我が大阪市民が、その大大阪の精神を發揮して茲にこの大會を開くに至つたとは収穫を楽しむ住む老婆の如きものがあると思ふ。

(「大阪毎日新聞」1923年5月21日)

極東競技大会の影響

現在においては、秩父宮がスポーツに熱心であつたことが広く知られているが、それが公の場で位置づけられたのも、この大会であつたようである。「この大会に秩父宮雍仁親王殿下を総裁に仰いだが当時としては空前のことで、親王殿下がスポーツ大会の役員に就かれた例はなかつたので、宮内省は承認を渋つていた。このため春日弘の奮闘の効あつて皇族を総裁に仰ぐことに成功した²²⁾」と日本選手団の主将であつた佐藤信一が回顧するように、新聞報道においても、秩父宮の動向が何度も取り上げられている。

また、当時の市民の関心の一例については大阪朝日も報じている。競技場以外での競技結果については、新聞社が掲示板を設置し、さらに北浜の「なだ万」前には、スピーカーを設置して報道することで好評を得たという。

刻々の速報に緊張す 本社特置の高聲電話機と 市内掲示板前の大群衆

本社前の大掲示板の前も正午すぎから熱心な人々が続々と集つて勝敗の結果の書かれるのを待つてゐたが最初百喙の第一豫選に日本の谷選手が一着と書かれたので一同の中には早くも「日本萬歳」を叫ぶ人があり一々手帳に書き留めて帰る熱心な人々が多くなほ阪神、京阪、南海、大軌、阪急等各郊外電鉄の停留所前や全市の本誌販売店前などの本社特設掲示板前には折柄の雨を物ともせぬ人々で到る所黒山のやうな人だかりを呈し、何れも迅速な報道を感謝してゐた。

22) 佐藤 (1954) 7 頁

又一方運動競技の記録を市民に速報すべく灘萬北濱食堂の濱に臨んだ三階露臺に特置した本社のラウド・スピーキング・テレホンは多大な歓迎をうけ、一競技の終る都度普通電話の数十倍の高聲で記録を発表するので熱心な聴衆は折から降り頻る雨中にも動じないで難波橋から遠きは對岸の銀行集會所下の運動場にまで傘をさしたまゝで動かず、居ながら極東大會の壯觀を胸裡に描いてゐた（「大阪朝日新聞」1923年5月22日付夕刊）



図5 「大阪朝日新聞」1923年5月22日付夕刊

さらに、開催期間の新聞記事でも入場券の売り切れや、満員の観衆の写真が掲載されていることから見ても、極東競技大会は日本人に、少なくとも大阪市民には大歓迎されたようである。大会から11年後に出された『明治大正大阪市史』においても、「会場は6日間を通じて満員の盛況」で、「競技場前の民家の二階は臨時スタンドに早変わりして五十銭・一円の入場料を収むる有様」と記録されている²³⁾。また、佐藤信一も「入場券が売り切れで手に入らないので困った熊本県から出張してきた小学校の記先生が場内案内人夫募集に応じ無事人夫に化けて」や「偽造、変造の切符まで飛び出す騒ぎ」があったことを回顧している²⁴⁾。

大阪朝日が発行する『運動年鑑』では、極東競技大会の成果として、スポーツの「民衆化」を論じている。さらに、ここでも、この大会を契機とした女子スポーツの台頭について積極的な評価を下している。少なくとも、極東競技大会が日本におけるスポーツの「民衆化」の時代的な流れの中で開催されたこと、そして大会開催がその流れを強化する契機となったことは確実であろう。

23) 大阪市役所編（1934）647頁

24) 佐藤（1954）12頁

数年來年一年と興隆の氣運に向つてきた運動界は、昨春頃から更に格段の緊張味を示し、一面各方面の運動が漸次秩序正しく組織立てられてくると同時に、其の民衆化は運動そのものと國民の生活とを一層緊密に結合させ最早一部階級の獨專を許さず、性の如何を問はず、老幼の區別なく運動が國民生活の必須なる一部分として其の位置を占むるに至るべき端緒をつくつた、殊に婦人の運動に對する愛好と興味は昨春以來急激に増加して、各種の競技會が各地に挙行され、我國婦人の運動に對する理解は益深くなつてきた、今次の極東大會に於て我が婦人選手が極東に覇を唱へ得るに至つたのも決して偶然の事ではない²⁵⁾。

2. 市岡パラダイスとスケートの隆盛

市電の開通によって、大阪市内中心部と大阪築港が結ばれたこと、さらに第一次大戦後の大阪の經濟の拡大によって、その中間地帯の港区市岡地域の市街地化が急速に進み、1925年（大正14年）7月1日大阪市港区西市岡町には市街地内の娛樂施設として、「市岡パラダイス」が開業している。

市岡土地株式会社支配人岡崎忠三郎が欧米の施設を取り入れて企画したもので、園内中央部に直径54メートルの大池を設け、その中に人工の岩山（高さ9メートル）を築き、三方へ滝を落とし、それに五彩の電飾を施した。また池中に貸ボートを浮かべ、アシカ十数匹を放ったこともある。入場料大人30銭小人15銭。園内施設は当時娛樂施設の尖端を行くもので主なものを挙げるとパラダイス劇場（桂座）ロサンゼルスミリオン・ダラーシアター劇場の設計を取り入れ、八木工務店の施工、昭和2年竣工、延750坪、鉄筋3階建、定員1000名。アイススケート場（北極館）滑走面積80坪、わが国室内リンクの草分けで、ロシアのプロスケーターを招くなどアイススケートの普及に貢献した。市岡パラダイスは昭和5（1930）年1月に閉鎖され、園内各劇場は各単独營業となったが、戦災によりパラダイス劇場のみ残して焼失した。パラダイス劇場も盛土工事のため間もなく閉鎖された²⁶⁾。

25) 大阪朝日新聞社（1923）1頁

26) 大阪市港区役所編（1956）59頁

日本初の人エスケートリンク

上記のように、娯楽施設「市岡パラダイス」内に「北極館」という名称でアイススケート場が開業し、それが、日本初の人エスケートリンクであった。開業が迫った時期に、大阪毎日、市岡パラダイスを「新歓楽郷」と表現し、様々な娯楽施設を紹介し、その後以下のように続ける。

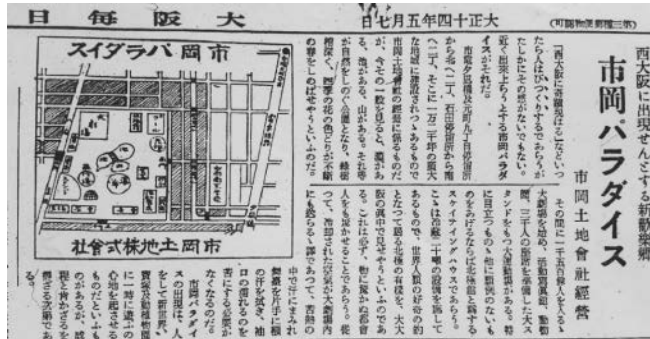


図6 「大阪毎日新聞」1925年5月7日

特に目立つもののほかに類例のないものを挙げるならば北極館と称するスケーティングハウスであろう。ここは冷蔵二十・の設備を施してあるもので、世界人類の好奇的となっている北極の有様を、大大阪の真ん中で見せようというのである。これは必ず、物に驚かぬ都会人をも驚かせることであろう。

（「大阪毎日新聞」1925年5月7日）

1920年代半ばまで、大阪は産業都市として発展し、多くの人口を抱え、都市問題にも直面する。また、所得の増加、余暇の増大等によって、郊外での余暇活動も次第に一部の富裕層だけのものではなくなってきている。逆に言えば、鉄道と新聞というメディアが、一部富裕層の「欲望」をより簡易に満たす方法を提示し、現場へと運んで行ったともいえよう。前稿で述べてきたように、その中で、大阪を中心として京都、神戸、奈良、和歌山を結ぶ私鉄が沿線事業を展開し、ますます「郊外」への欲望を強化させていく。京都奈良への古都巡礼、大阪湾沿岸の水泳、六甲山への登山やスケート、有馬や宝塚での温泉と観劇、大阪という都市の周辺には「郊外の欲望」がきらめく時代であった²⁷⁾。そのなかで、港区市岡

27) 黒田（2019）

の埋め立て地に人工のスケートリンクが作られたのである。このアイススケート場は、都市研究者の中でも知られており、橋爪紳也は、以下のように記している。

市岡パラダイスがオープンしたのは1925（大正14）年7月。新田を所有していたデベロッパー「市岡土地株式会社」の経営になるアミューズメントパークである。11,600坪の園内には飛行塔、屋内スケートリンク、「仙人風呂」と称する大浴場などが設けられた。舞台をそなえた広い休憩室では、人形浄瑠璃等のエンターテインメントが常時、上演されていた。郊外型遊園地の先駆けのひとつと考えてよい²⁸⁾。

橋爪は「市岡パラダイスを郊外型遊園地の先駆けのひとつ」とする。しかし、「郊外型遊園地」の定義にもよるが、市岡という土地は当時であっても、距離的には「都心」に近い地域である。当時の大阪毎日新聞も、「氷の国 市岡パラダイス 夏の歓楽はここに集まる」という見出しで、「わざわざ郊外に出て行くことは時間と労力と経済とにおいて多忙な現代都市生活者にはふさわしくない」としている。

大都市の夏季納涼は市の内部になくはならぬ。わざわざ郊外に出て行くことは時間と労力と経済とにおいて多忙な現代都市生活者にはふさわしくない。この意味から筆者は先ず大阪の新遊覧場市岡パラダイスを推奨する。……（省略）魔宮殿には巧みに人を魔化して一度見る価値は充分ある。奇抜な北極館は、これまさに氷国の出現で数万円金を投じた約100坪の結氷槽、6000余尺の鉄管を東洋における唯一の人造氷滑り場で盛夏のこの頃大阪の真ん中で真のスケートが出来様とは驚くの外ない。

（「大阪毎日新聞」1925年8月1日）

市岡パラダイス「北極館」の完成以前は、阪神間でのスケートは冬期に六甲山でする他はなかった。しかし、これができたことにより都市中心部で、季節を問わず年中アイススケートが出来るようになったことで、多くの庶民にアイススケートが認知され、普及を促したと考えていいだろう。年中滑走可能な屋内リンクの出現により、スケート技術の向上にも貢献したようだが、これについては次項で述べる。さらに、もう一つ注目してもいいのは、この当時、「郊外への欲望」が増大し、郊外に遊園地や住宅地が開発されたことは先

28) 橋爪 (1998) 28頁

に述べたが、都心の人びとに生まれた郊外娯楽への欲望を都市部へ引き戻すものでもあったと言えよう。

当時、この近くで育った放送作家の永瀧五郎は、次のように回顧する。

大人五十銭、子供二十銭の入場料を払うと、広い園内で一日中自由に遊べる。マキノ映画の封切館あり、漫才・安来節・浪曲の演芸館もあった。野外サーカスもあった。すべて入園料に含まれて出入り自由なのだ。特筆すべきは、アイススケート場があったことだ。恐らく大阪初のスケート場であったろう。園内の中央には石組が高く積み上げられ、人口の滝が音をたてしぶきをあげて落下していた。その附近には茶店が並び、四季それぞれの樹木が植えられて、花の絶えることがなかった。近郊近在の人々の手軽で安直な行楽地で可なり繁昌していたようである²⁹⁾。

永瀧の回顧のように、この地域は新たに開発されたとはいえ、20年代開発の進んでいた「郊外」とは違い、庶民たちの暮らしがあり、住宅が密集していた「市内」であった。従って、先の橋爪の指摘は、「市内」に建設された市岡パラダイスが後の「郊外型」遊園地の先駆けとなったという意味があろう。そして、郊外の遊園地が「健康」志向とともにもてはやされる時代に、市内の遊園地としての輝きは急速に失われたのかもしれない。

市岡パラダイスは1930年に閉鎖され、さらに、跡地で個別に営業を続けていた映画館も、1933年9月の室戸台風の高潮で浸水する。

大阪スケート倶楽部

市岡パラダイスの「北極館」が、日本最古の人工スケートリンクではあるが、その直後から、東京や横浜でも人工リンクが誕生している。他地域のスケート文化については不明であるが、少なくとも阪神間に関する限り、六甲山頂で始まったスケートという郊外娯楽とスポーツが、都市内にリンクができるようになって、さらに、身近なものになった。このことを物語るエピソードを後のオリンピック選手は語っている。

大正15年3月、日本初の人工室内スケート場市岡パラダイスの氷上に私の第一歩を踏み出し、スケーターの産声を上げたのでした。丁度その日は日曜日に当たり、手狭

29) 永瀧五郎（1984）31-32頁

いリンクは人の波で埋まり、氷に踊らされて転ぶ人達の醜態があちこちで起こるたびに、観客席からドッと笑いが上がる。無論私も例に洩れず、その声を上げさせた一人で、悪戦苦闘すること2時間余り、漸く氷の持つ妙味に魅かれ始めて以来、雨が降ろうが、風が吹こうが、雪が降ろうが、リンク通いは一向に止められず、遂に市岡スケート倶楽部に入会したことから、私の人生はスケートに大きく塗り替えられたのでした。そしてこのクラブで、大阪府スケート連盟及び大阪スケート倶楽部の創始者田山さんにめぐり逢い、私との深い交流が、この時点で始まったのです。(以下省略)³⁰⁾

「大阪スケート倶楽部」は、市岡パラダイスのアイススケートリンクで、まず「市岡スケート倶楽部」として結成された。ここからは、初の冬季オリンピック選手稲田悦子も育っている。

佐藤信一の回顧『大阪スポーツ史 大正昭和初期』（大阪市体育厚生協会、1954年）の最後に「大阪のスケートは、結局フィギュア・スケートを屋内リンクで育てることになって一時は全日本で一位から五位までを占めるほど隆盛であった³¹⁾」と締めくくっている。

おわりに

電鉄会社の作ったスポーツ施設、朝毎による新聞事業としてのスポーツ大会の主催、後援、そして大阪の体育関係者によって、スポーツが組織化されていく。この経過を極東競技大会の取り組みを中心にまとめたが、本研究ノートで新たな課題が明らかになった。関西におけるスポーツ団体の役割と、それを組織した人物、そしてその中心人物の多くが新聞社に所属していた。この組織と人物の足跡を明確にする課題が浮かび上がってきたのである。これについては、大阪市の教育視学であった佐藤信一『大阪スポーツ史 大正昭和初期』（1954）を参考にしながら、本稿では簡単にまとめておき、詳しくは次稿以後で論じたい。

関西におけるスポーツ団体の組織化

初期のスポーツ団体としてもっとも有名なものは「天狗倶楽部」であり、明治後期から

30) 老松一吉「大阪スケート倶楽部と私」

31) 佐藤（1954）126頁

大正期のエリートスポーツ文化として語られる。1900年、尾崎行雄、押川春浪、前出の三島弥彦などによって東京で設立された同クラブは、英国のブルジョアスポーツ文化の在り方を模したものであるが、その後の日本のスポーツ文化の発展に一定の影響を与えたと評価される³²⁾。関西でのその影響の一つが、まさに1910年に設立された「大阪天狗倶楽部」である。

高瀬養は木下東作に話し大阪の天狗倶楽部を結成した。天狗倶楽部野球、庭球、ボート、柔道、相撲、講演等を行い、名古屋、徳島、高野山、岡山、和歌山等からの招きに応じ出向し運動界の革新と興隆に努め、又運動界の物故者の慰霊法要を施行するなど異色ある活動に終始した。天狗倶楽部の同人は東京では尾崎行雄、押川春浪、大村一蔵、吉岡信敬、弓館小鰐、大村幹等…³³⁾」

さらに、1913（大正2）年大阪市体育奨励会は、1922年大阪体育協会となる。大阪にも、学校体育を越えたスポーツ団体、あるいはスポーツ連盟が組織されていくが、その組織と運営の中心となっていたのが新聞人であった。あるいは、医学界、研究の分野の人材が新聞社と協力、また入社することでスポーツ事業が展開されたのである。この時期の新聞社と関係してのキーパーソンとなるのが、西尾守一、東口真平、木下東作であろう。

西尾守一は、大阪の出身で堂島中学（後の北野中学）から、1906年早稲田大学に進学、1909年香榎園でのシカゴ大戦の球審、1910年アメリカ遠征主務、1911年大阪毎日新聞に入社直後、「クロスカンントリー」事業に取り組んでいた。1919年第4回極東大会マニラ大会に向けての日本青年運動倶楽部の組織にも関係し、大阪毎日新聞を一旦退職しマニラに向かい、第4回大会の開催に貢献している。

東口真平は、東京高師で柔道と短距離で活躍し、大阪朝日新聞入社後、大阪体育協会の組織にも関係し、理事をつとめた。さらに、朝日新聞の事業として、日本体操大会、京阪神三都市青年団対抗駅伝の開催を担当したが、1944年南方で飛行機事故で亡くなっている。

木下東作は、1878（明治11）年6月生まれで、京都出身、東京帝大卒、大阪府立高等医学校に就職し、1921年大阪医専教授から大阪毎日新聞社の編集顧問となり、22年運動部長となっている。木下は日本初の新聞社主催の競技会といわれる1901年の不忍池長距離競走

32) 横田（1993）、横田（1999）

33) 佐藤（1954）3頁

にも医大生として出場している³⁴⁾。1913年日本女子スポーツ連盟を設立したほか、人見絹枝を大毎に入社させ、育てたことでも知られている。またスポーツの世界に運動生理学を導入したとされ、多くの啓蒙書や講演を行っている。

彼らは、関西における新聞社とスポーツ界の協力事業の各場面に登場しているが、詳しくは事稿に譲りたい。

【引用・参考文献】

- 遊津孟『日本スポーツ創世記』恒文社、1975年
井上俊他編『都市と都市化の社会学』岩波書店、1996年
老松一吉「大阪スケート倶楽部と私」(大阪スケート連盟提供資料)、1967年
大阪朝日新聞社編「運動年鑑 大正12年度」大阪朝日新聞社、1923年
大阪市史編纂所編『明治期大阪市電関係史料：「大阪経済雑誌」にみる』大阪市史料調査会、2015年
大阪市役所編『明治大正大阪市史 第1巻 概説篇』日本評論社、1934年
大阪市電編集委員会編『大阪市電：路面電車66年の記録』鉄道史資料保存会、1980年
大阪市港区役所編『港区誌』港区創設三十周年記念事業委員会、1956年
大阪毎日新聞社編『浜寺海水浴二十周年史』大阪毎日新聞社、1926年
角野幸博『郊外の20世紀：テーマを追い求めた住宅地』学芸出版社、2000年
黒田勇「20世紀初頭の電鉄事業とメディアスポーツ① ～阪神電鉄開業時の郊外開発とスポーツ～」関西大学『社会学部紀要』51巻第1号、2019年
佐藤信一『大阪スポーツ史 大正昭和初期』大阪市体育厚生協会、1954年
鈴木博之『都市へ 日本の近代10』中央公論新社、1999年
砂本文彦『近代日本の国際リゾート：一九三〇年代の国際観光ホテルを中心に』青弓社、2008年
高木応光『神戸スポーツはじめ物語』神戸新聞総合出版センター、2006年
高嶋航「『満州国』の誕生と極東スポーツ界の再編」『京都大学文学部研究紀要』第47号、2008年3月
竹村民郎、鈴木貞美編『関西モダニズム再考』思文閣出版、2008年
竹村民郎『阪神間モダニズム再考（竹村民郎著作集；3）』三元社、2012年
棚田真輔・表孟宏・神吉賢一『プレイランド六甲山史』出版科学総合研究所、1984年
棚田真輔・青木積之介『阪神健脚大競争』いせだプロセス、1988年
橋爪紳也『なにわの新名所（都市えはがきⅠ）』東方出版、1998年
阪急電鉄株式会社編『75年のあゆみ』記述編、写真編。阪急電鉄、1982
シュテファン・ヒューブナー（高嶋航・富田幸祐訳）『スポーツがつくったアジア 筋肉的キリスト教の世界的拡張と創造される近代アジア』一色出版、2017年
平沼亮三『スポーツ生活六十年：聖火をかかげて：スポーツ市長・平沼亮三伝』大空社、1994年
李代哲雄『評伝 田畑政治 オリンピックに生涯をささげた男（新装版）』国書刊行会、2018年
横田順彌『快絶社遊「天狗倶楽部」』教育出版、1999年
横田順彌『「天狗倶楽部」快傑伝 元氣と正義の男たち』朝日ソノラマ、1993年
若林幹夫『郊外の社会学：現代を生きる形』筑摩書房、2007

34)「時事新報」1901（明治34）年11月8日、9日付

若林幹夫『都市の比較社会学：都市はなぜ都市であるのか』岩波書店、2000年

新聞・雑誌

『運動世界』

『大阪朝日新聞』

『大阪毎日新聞』

『時事新報』

『野球界』

—2020.1.29 受稿—